



俳句の基本

三段切れに注意

秋澄むや電気柵また電気柵

豊 國

田舎はどこに行ってもイノシシや鹿の電柵で集落全体が囲まれているようですが、中七下五の繰り返しを言わんとしています。でも秋の空気はいつものように美しく澄んでいます。

平江帯の揺れて晩夏の日が沈む

富田 一主

ヒコダイは、小さなまん丸いむらさき色の花を風になびかせます。夏の終わりに一足早く飯田高原にお目見えです。大草原の夕日の映像が美しく浮かびあがってきます。

懸命に生きて悔いなし秋の蟬

桐 友

蟬(セミ)の寿命は一週間前後、一つのセミが秋まで鳴き続けているわけではないが、秋のセミは夏が終わったなという感慨が。「懸命に生きた悔いはない」と作者が自身に言い聞かせてます。

今月の推薦句

秋海棠俯きながら誰を待つ

泉 溪

秋海棠

秋海棠は九月頃、淡紅色の花がうつむくように咲く。海の名があるのは海外から渡航した植物であるという意味。芭蕉の句に「秋海棠西瓜の色に咲きにけり」という句があるが、古くから親しまれている花でもある。中七の「俯きながら」で何だか乙女心を想像させるような一句に仕上がりました。

読者俳句

ふるさとの俳人たち

その⑨ 藤井綏子 番外編

俳人というより作家、エッセイストでもある藤井さん。久留米のご出身で「文芸山口」や「筑紫古代文化研究会」に所属され文壇で活躍後、事故でご主人亡くされた後、湯坪に居を構え民宿をはじめられています。四十二歳の時である。以来、「玖珠郡史談会」などにも所属され、一時期は倉田紘文氏の「路」にも投句されており、「大分県百景句集」に貴重な句を発見。いずれの句も写実性の豊かさが。

山上の沢原わたるいわし雲

雲の行く峠の道の馬酔木かな

裾長き孤峯のはてはすき原

山をこよなく愛されたご主人との思い出を秘め「叶館」と名付けた民宿は、その後、半世紀にわたり続いている。泉水の山を一望する叶館の庭には季節の花々が栽培され、まるでイギリスの田園を思わせる風情。また特筆すべきは、娘さんの衛子さんの挿絵で合作した「山庭の四季」。これは第五集まで発刊されておりくじゅうの草花の集大成でもあり、俳句を愛する人には魅力満載の書でもある。

雪残る久住と並べ夫を撮る

叶館での日々の生活は、ご主人との思い出を確かめる日々でもありました。ちなみに「叶館」(叶う館)とはすなわち「カナン」(約束の地)「くじゅう」はご主人との約束の地でもありました。(「山庭の四季」①②は九重町図書館に寄贈されていますので一読ください)



佳作 十九席

右の耳左の耳や虫時雨 律子
曼珠沙華誰と話そう過疎の村 ヨウ子
松蔭の二十九年や萩の月 直人
十六夜の窓に訪う午前四時 則子
産声の仔牛うれしや秋の風 ムツ子
野分雲依担いで蟻の列 ヤスコ
軽トラに乗り秋祭やつてきた 左世美
行き会いの空飯田の野過ぎゆけり 香澄
法要や安穩念じ十三夜 八千子
田を守る赤白黄色曼珠沙華 重吉

雲間にてそつと紅ひく良夜かな チリリンとおいとまします秋風鈴 トシ子
母さんと呼ばれ振り向く宵の月 純子
新米をつまみ食いする味見かな 末子
気まぐれな貴方に似てる秋の空 チズ子
玖珠富士の雲の頭巾や秋日和好 美
細やかな奉仕活動菊日和 恒己
行き行けば夕日背にして吾亦紅 良子
リモートでカルスト台の秋をゆく 次江

(選者・評)「私は俳句を日記のようにつくることをお勧めします。正直に素直にそのとき生きた記録を書いていく、それがもっとも親身で無理のない句作だと思います。」俳人岡本陣の言葉です。納得です。ですが、なかなか毎日一句はできません。でもつくろうとしないければなお不可能です。そこで提案、とりあえず日記を書く、そこからもう一度挑戦。以外とその日の出来事が句になることがあります。とても便利でいい日記です。ぜひ皆さんもインターネットで検索してお求めください。▽来月号はもう晩秋。季語の先取りでたくさんのご投稿お待ちしております。

11月号の締め切りは、10月27日(必着)でお願いいたします。選者(古後粒勝)宅にハガキ等で直接送付いただいても結構です。住所(九重町大字栗野1414番地)



広報ここのえは、環境にやさしい再生紙と植物性インクを使用しています。



広報ここのえは、UD文字を使用しています。